

島の風土とともに生きる巧みの技を次代に継承

「第三章」

奄美の養蚕と島絹の復活

奄美大島は日本の西南の海に浮かぶ大きな島で、昔は養蚕の大変盛んな土地柄でした。この島特有の島桑で育つ蚕の繭から真綿糸を紡ぎ、玉糸は座繰りして名産の大島紬に用いていたのです。ところが、世の趨勢でしだいに養蚕が衰えていたのですが、このたび、「奄美市馬絹推進協議会」の手で奄美の養蚕が復活し、新たな大島紬ができましたので、その工程を追ってみました。

撮影 伊藤千晴

撮影協力 奄美島絹推進協議会

みなみ紬 夢おりの郷



[右] 奄美大島特有の「奄美島桑」。一年中落葉せず青々としています。[中] アダンの実。パイナップルに似ていますが食用ではなく、主に幹を煮出して染材に用いています。[左] ソテツ。葉は養蚕の蔴（まぶし）に用い、実の皮は染材に用います

宝の絹

純国産絹の華麗なる伝統と次代への継承





3 桑の中の繭と蚕

「奄美黄金繭」種の蚕が、桑の枝の中に繭を作ったところです。今、動いている蚕も順に繭をつくっていきます。



4 回転簇の中の繭

回転簇の四角く区切られた枠の中に、蚕が1頭ずつ入って繭を作ります。2頭入ると玉繭になります。



5 奄美黄金繭

簇の枠の中で作られた繭です。繭は黄金色ですが最初に吐いた支えの糸は黄金色ではなく白色。

奄美島絹推進協議会が 取り組む養蚕の復活

日本中のきもの好きが、競うように大島紬を求めるのに併せて、奄美では、いちだんと高度な技術を駆使した高額品を開発してきました。今、好景気に沸き返った数十年を経て、原点に回帰する道を探っています。

「奄美島絹推進協議会」会長の南祐和

奄美大島は大島紬発祥の地で、きもの愛好家にとっては、懐れの土地のひとつ。その奄美では、かつて盛んに養蚕がなされて、昔ながらの手紡ぎの糸を用いた大島紬が織り継がれてきました。ところが、手紡ぎ糸は大変手間の掛かる作業が必要ということと、世の中の好みガラリとした絹糸の紬に傾いたことが相俟って、次第に手紡ぎ糸は使われなくなりました。さらに、戦後の大島紬の一大ブームを境に、すっかり島での養蚕は姿を消してしまいました。蚕を飼う時間と人手は、大島紬を織り上げるほうに移動したのです。



1 島桑の採集

島桑の葉を摘む南修郎さんです。奄美大島の佐仁地区にある「みなみ紬」の工房では養蚕がなされています。近くの畑で島桑を栽培しています。



2 蚕に桑をやる給桑

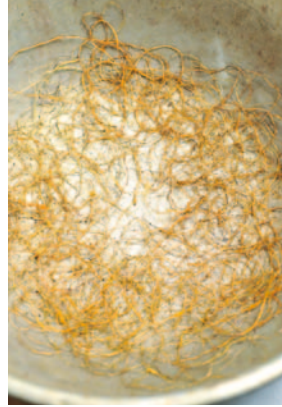
蚕は「奄美黄金繭」という新しい種類で、繭が大きめで糸は黄金色が特徴。手前が弟の南修郎さん、奥はお兄様の祐和さん。



9

導き糸に捌めます

黒い導き糸を芯にして、染めて湿ったままの繭から糸を引き出しています。今では珍しくなった伝統の古法です



10 糸が少しずつたまります

ずる引きは、静かにゆっくりと糸を引き出すため、少しずつ少しずつ糸がたまっていきます



11

テーチ木を煮出します

テーチ木は奄美大島に自生する植物・車輪梅。幹をチップにして2日間煮出した赤茶色の液で、繭や糸を染めます



6 輝くばかりの繭ができました

レモンよりも濃い黄色の繭です。繭の色を生かして繰糸するだけでなく、紬の種類によっては左写真のように繭を染めても使います



7 白くて大きな「春嶺鐘月」

蚕が丈夫で健康に育ち、繭糸涼も多いため、世界中で愛された蚕種「春嶺鐘月」。日本の「鐘紡」が開発した蚕種

12 テーチ木で染め、鉄媒染した繭

テーチ木液で染めると赤茶色になり、工房近くの鉄分の多い水で洗うとこの黒さになります



13 この繭もずる引きします

黒みがちに染まった繭から糸を引き出しています。器具は使わず指先で静かに引き出します

8

繭から糸を引き出す奥 富佐さん

クチナシで染めた繭から「ずる引き」の手法で糸を取る奥富佐さんは、南さん兄弟のおば様



16 大きな鍋で煮ます

鍋に入る大きさに切ったアダンを水に入れ、4、5時間煮出します。その後、ひと晩冷まして染液を落ち着かせます。



15 根に切り目を入れます

アダンの根は鍋に入れる前に、中の色素成分を抽出しやすくするため5cm間隔くらいで切り目を入れておきます。

14 アダンの根の刈り取り

アダンは南国特有の樹木で、根がタコ足のように伸びて幹を支えています。昔からこの根で糸を染めてきました。



染色は島に自生するアダンの根やソテツの実の皮、桑の枝などを用いるほか、もちろん、テーチ木の染液をふんだんに用いて独特の色を出しています。アダンの根からは薄茶色やグレー、青磁色が得られます。ソテツの実の皮からは、吸い込まれるような濃いモスグリーンの色が出ます。桑の枝からは上品なベージュ色が生まれます。テーチ

さんは弟の修郎さん、その他の同じ思いをいだくメンバーとともに「奄美が大切に守り伝えてきた、伝統の技術と原料を用いた物作りを復活させよう」と協議会を立ち上げました。
まず、島に自生している「島桑」を栽培し、島ならではの蚕種の開発を依頼し、輝くような黄色の「奄美黄金繭」が誕生しました。蚕種は「愛媛蚕種」のもので、もちろん養蚕の大部分は、丈夫で飼いやすい蚕品種の「春嶺鐘月」です。この繭を群馬県の「確水製糸」に送り、純白の生糸に引いてもらっています。



19 今一度染めます

石灰水で中和させた糸を、今一度アダンの染液に入れて染めます。その後、きつく絞って干します。

18 石灰水で中和させます

染めた糸を石灰水の中でゆすぎ、アダンの染液に多量に含まれるタンニン成分を中和させます。



17 アダンの染液で糸染

アダンを煮出した液は澄んだ濃いめの茶色をしています。白い糸束をそっと入れ、優しく繰り返しながら染めます。



20 銅媒染しています

2回アダン染めした糸の半分はそのまま干し、残りは銅の媒染液に浸しました。すると、少し水色がかかった淡い青磁色に。

宝の絹

純国産絹の華麗なる伝統と次代への継承

22

染材と媒染による色の違い

右から順に、ソテツの実の皮が染材、アダン染で上が銅媒染、下は媒染無し、桑の枝が染材。



23

染めた糸を干します

染め上がった糸は竿に掛けて風に当てながら乾燥させます。右端の黄色は福木の灰汁媒染。



21

銅媒染した糸は淡い青磁色

媒染剤によって糸の色はさまざまに発色します。銅媒染では明るい色に発色。ここでは青磁色

木からは大島紬の地色で馴染み深い赤茶色が染まります。また、媒染剤の違いで、思いもよらない魅力的な色が得られることは、不思議なことでした。島の土地にはそれぞれ鉄分の強いところ、銅分の多いところとさまざま、特別な媒染剤を使わずとも面白い染め上がりとなることも、奄美ならではの土地からの恩恵と思えたのです。

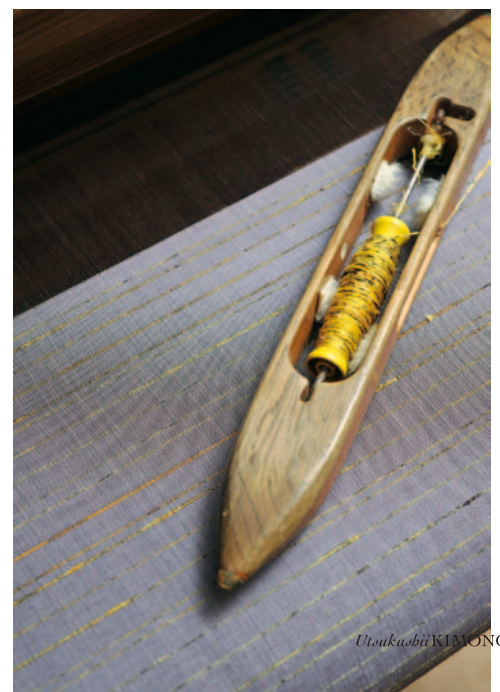
また、奄美黄金繭は、南兄弟のおぼ様・奥富佐さんが繭から直接糸を引き出す、昔ながらの「ずる引き」の手法で引いてくれます。緋作りは熟練の職人に託しますが、機織りは修郎さんの手でなされます。修郎さんはやんちゃな少年時代に、手を焼いたお母様から「根気強くやるように」と、機織りを仕込まれました。当時は嫌々ながら覚えた機織りでしたが、今は、「若いときに覚えたことが身を助けてくれます」とおっしゃるほど熟達し、厳しく教えてくれたお母様に感謝しています。

でき上がった創作性の高い島絹は徐々に製品になり、きもの愛好家の手に渡り始めました。好評を得て、奄美の養蚕の復活が期待されています。

24

奄美島絹の生機と緯糸

織り進められた奄美島絹の織り上がったばかりの生機。南さんのおば様が引いた糸は緯糸に用いました。



25

機を織り進める南修郎さん

高校時代にお母様から教えてもらったという機織りの技術が「今、役立っています」という、修郎さん。軽快に織り進めます。





宝の絹

純国産絹の華麗なる伝統と次代への継承

奄美黄金繭、春嶺鐘月使用奄美島

従来の大島紬とはひと味違う地風と洗練された緋使いの奄美島絹。糸も染材もすべて奄美大島産を用いて作られた希少な紬です。